

【三宅島】「知っ

て楽しい三宅島 考
古学シンポジウム
ココマ遺跡」（主催
・ココマ遺跡学術調
査団、協賛・三宅村
教育委）が6月28日、
三宅島郷土資料館で
開かれる。

シンポジウムでは、2
007年7月に行ったコ
コマ遺跡の発掘調査の研
究成果を考古学、火山学、
動物考古学の分野から発
表を行うとともに、出土
した弥生土器や貝で作ら
れたプレスレットなど、
実物を見ながら分かりや
すく解説する。

ココマの遺跡は、およ
そ2千年前の貝塚だが、
当時の人たちはどこから
やってきたのか、何を食
べてどのように生活をし

三宅人どこから来た？

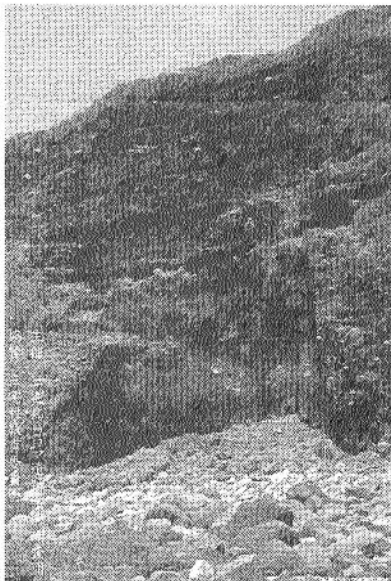
三宅島で
6月28日
ココマシンポ開く

ていたのか、島の宿命と
々の生活にどんな影響を
いわれる噴火は当時の人
及ぼしたか——など、シ

知って楽しい三宅島
考古学シンポジウム

ココマ遺跡

「弥生時代の人々の交流、そして火山噴火」



弥生土器の破片
(6月28日撮影)



弥生土器のプレスレット
(6月28日撮影)

2007年7月に坪田地区のココマ遺跡にて考古学、火山学の調査を行いました。シンポジウムでは、調査の報告とともに出土した弥生土器や貝で作られたプレスレットなど、実物を見ていただきながら皆様に分かりやすく解説します。この機会に島の歴史・文化の一端に触れてみませんか。
ぜひともお気軽にお立ち寄りください。

ンポジウムで報告する。
主催者代表の杉山浩平
さんは、「この機会に自らの
島の歴史・文化を再認
識しませんか」と島民の
参加を呼びかけている。

【ココマ遺跡のボスター】

【寄稿】伊豆諸島に人がやってきた始まりは、旧石器時代後期（今からおよそ1万3000年前）のころである。神津島で採れる黒曜石が関東地方の遺跡で出土していることから、人々が船で渡ってきたことが分かる。当時は今より海水面が低いとはいえ、陸続きではない。丸木船かなにかで渡ってきたのだろう。

そもそも、どうして神津島で石器の材料となる黒曜石が採れる、と当時の人々は知ったのだろうか。漂流の果ての偶然の産物なのだろうか。

ときには黒潮が流れるほど危険な航海に、なぜ人々が出掛けたのだろうかと思うと、その気持ちをもっと知りたくなる。

当時どうい生活をしていて、どういう物を食べていて、どういう環境で

あったのか。こうした疑問が私たち「島の考古学研究会」の出発点である。神奈川県小田原市にある筆者の生家は、海岸に面したところにある。家や東海地方の遺跡から出てきた弥生時代の石器を望み、晴れていれば伊豆諸島が見渡せる。しか

三宅人 どこから来た

三宅島の考古学 火山学の研究

①

島の考古学研究会 代表 杉山 浩平

し、筆者にとつて伊豆諸島のほか出土していることに驚いた。黒曜石とは、天然のガラスで、その割れ口が鋭いことから、旧石器時代以来、石器の素材として用いられた石材である。

現在、日本列島にはおよそ60カ所の黒曜石の原

産地が確認されており、遺跡から出土した黒曜石を理化学的に調べると、この産地のものか分かる。黒曜石を運んだ人々の往来が推測される。



神津島産出の黒曜石（池谷信之氏提供）

00点の黒曜石製石器の産地を推定した。その結果、弥生時代中期中葉という時代（およそ今から2200年前）に神津島産黒曜石が、大量に運ばれていたことが明らかになった。この現象は、また、さらなる「疑問」と「島への思い」を私たちに投げかけてきた。「なぜ、このような黒曜石の流通が起きたのか」そして、「自分たちの手でそれを解明してみたい」

伊豆諸島の考古学的研究に強い関心を持つようになり、初めて三宅島を訪れたのは2007年3月2日であった。また暗い錆ヶ浜港に仲間4人で降り立った。考古学を勉強するもの2人、火山学を勉強するもの2人であった。私たちの研究・調査は最初から考古学と火山学との共同研究として進めることとしていた。それは、島の歴史は、火山噴火の歴史と直接的に関わりがあると考えていたからである。

当時、職場の研究プロジェクトで関わりがあり、三宅島の火山噴火を研究していた新堀賢志氏に相談し、一緒に三宅島の歴史を研究しようという意気投合し、歴史研究・災害研究・そしてその成果を島の人々へどのように伝えればよいかという研究、の3つを柱として三宅島に降り立ったのであった。この時の調査では、主に三宅島の遺跡が2000年の噴火を経て、今どのような状態になっているのかを知ることになった。そして、ココマ遺跡を訪れた際に後に調査することになる貝塚の一部を発見したのだった。

東京都の指定史跡として専門としている忍澤成規、青木委員会にもさまざまな点で協力いただけたこと、幸いだった。

2007年7月26日から30日、とても暑い最中である。事前に東京都教育委員会に史跡の保護について話を聞いていたため、そのときは土器や貝を鋭く見抜いていた。こ

三宅人 どこから来た

三宅島の考古学 火山学の研究 ②

島の考古学研究會代表 杉山浩平

写真をとくさん撮るだけで

あった。印象といえば、

「貝が多いな」というぐらいいであつた。その後その資料をもとに東京で研究會を開き、三宅島の遺跡がいまどのようなになっているかを報告した。

その際、遺跡から出てくる動物の骨や貝を特に

が可能となり、三宅村教

くすれば、弥生時代後

マ遺跡にいた人々は頻繁に三宅島を離れていたことである。(つづく)



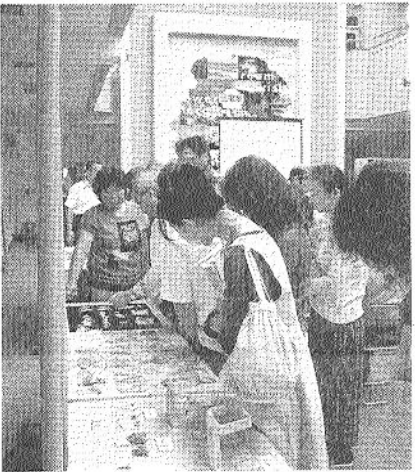
ココマ遺跡を発掘調査する研究者

期初頭という時期(およそ2000年前)にココの人々は火山噴火の影響

知って 楽しい 考古学シンポ

三宅島で ココマ調査団が

【三宅島】「知って楽しい三宅島考古学シンポジウム」(主催・ココマ遺跡学術調査団、協賛・三宅村教委)が6月28日、三宅島郷土資料館で開かれ、島民ら50人が出席した。



発掘品を見るシンポ参加者

始めに杉山浩平代表から、元三宅高校社会科教諭、橋口尚武氏(考古学研究者)から、調査後の成果を島に伝えるように勧められ、発表に至った経緯や、発表の概略について説明があり、会場には約50人が集まって熱心に耳を傾けた。

表・杉山浩平さんが、「貝の話」は千葉県市原市教委の忍澤成視さんが、「火山の話」はNPO法人環境防災総合政策研究機構の新堀賢志さんがそれぞれ解説した。

会場には土器、貝輪、魚や動物の骨などが展示され、来場者は手にとってみたり、質問するなど、盛況だった。

「ココマ遺跡」については島の考古学研究会代

【寄稿】こうした研究で伝えてください」と記
成果が、出そろって来たところ、筆者は橋口尚武氏に手紙を出した。橋口尚武氏は、昭和40年代に三宅高校の社会科の教諭としており、三宅島を初めて伊豆諸島の考古学調査・研究を行っていた第一人者である。現在は生まれ故郷の鹿児島に住んでおられる。

筆者は面識が無かったものの、氏の著書を読んで勉強していたこと、筆者の父が橋口氏と知り合っていたことから、三宅島で調査・研究を行っている旨の手紙を書いた。

三宅人 どこから来た

三宅島の考古学 火山学研究 ③

島の考古学研究会代表 杉山 浩平

数日後にいいいな返信をいただくことができた。その中で、橋口氏はぜひとも「研究成果を島の人々に分かりやすい形

で伝えてください」と記
成果が、出そろって来たところ、筆者は橋口尚武氏に手紙を出した。橋口尚武氏は、昭和40年代に三宅高校の社会科の教諭としており、三宅島を初めて伊豆諸島の考古学調査・研究を行っていた第一人者である。現在は生まれ故郷の鹿児島に住んでおられる。

であり、意外と島の方々が島の歴史や遺跡について知らないということが分かると、ついつい、こちらから話してしまう。筆者は、2007年3月に三宅中学校の総合学習の時間に「三宅島の大昔の生活」と題した授業

私たちが研究をしての最後に、子供たちに次も、その成果が島の人々に知ってもらえなければ、自分たちの自己満足ではないというのは、すこしきれいなこと過ぎるかもしれない。しかし、調査

地元の方々の協力は必要
流れていたんでしよう。

だから、命の危険を冒し人いろいろな魅力を感じてまでも、船で渡って来ているかと思えます。三宅島のだと思います。皆さ



50人が参加した考古学シンポジウム(三宅島郷土資料館)

「私たちの歴史研究の成果が、新たな三宅島の魅力の再発見や発信に少しでも寄与することができれば、望外の喜びと感じます。」

島の考古学研究会の主な三宅島での活動

2007年3月三宅島の島内遺跡の踏査。7月三宅島ココマ遺跡の発掘調査。11月三宅島島内の考古資料および火山噴出物の地質調査。

2008年1月三宅島島内の考古資料調査。3月三宅中学校の総合学習授業「三宅島の大昔の生活」。4月三宅島坊田遺跡の発掘調査(5月4日に発掘現場の説明)。5月三宅小学校での出前授業「大昔の坊田地区」。(おわり)